

## 新聞を読んで

青柳さつき

インドでは約 24,000 人の日本語学習者に対し日本語教師は 655 人のみの状況。これは国際交流基金が 2015 年度に行った調査結果です。

菅官房長官は、9 月 12 日の記者会見におき、安倍首相の訪印に関する発表の中で「今後、5 年間でインド人日本語教師を 1000 人育成する為の支援方針」を述べています。もちろんこれは、2020 年東京オリンピックを見据えての発言だと思えます。

他方、観光庁は「2017 年の訪日外国人数が、9 月 15 日時点で推計 2000 万人を超えた」と発表しました。つまり、私達の想像以上に日本及び日本語に関心を持つ外国人がいかに多いかと言う訳です。この状況は、国際社会における日本語の存在が大きくなった結果であり、経済面でも潤いをもたらす喜ばしい事です。

しかし、私達日本語ボランティアにとってはどうでしょうか。私達は母語の日本語を当然のごとく自由に使います。もちろん、会員各自が学習、研修を重ねている事とは思いますが、学習者の増加に伴い彼らの疑問や質問も多岐にわたってきます。当然、私達自身の日本語能力の必要性も高まってきますし、言語のみに限らず文化、歴史等《日本についての幅広い知識》も要求されてくるでしょう。さらに、それらは永遠不変ではありません。その変化が進化か退化かは一概に言えませんが、変わり続けて行くのは確かでしょう。

ボランティア = 奉仕活動、この基本精神に変わりはないものの、学習者にとり私達のものさしは正しいでしょうか。過度の責任感を持つ必要はありませんが、会員各自も学び続ける大切さを痛感します。そして、そのこと自体は苦痛な義務ではなく、私達自身にとっても有意義な活動となり得るのではないのでしょうか。

\* 参考 毎日新聞 2017 年 9 月 13 日/9 月 21 日